優希

私は、探偵という職業に憧れている。

優希

ミステリーに登場するような、

どんな難事件も瞬く間に解決してしまうような、

そんな人物に、憧れている。

優希

勿論というか、現実はそんなに甘くなくて、

小説に登場するような華麗な探偵はいなくて、

探偵の仕事が泥臭いものなのは知っている。

優希

けれども、だけれども、

それでもやっぱり、思うのである。

優希

ドラマに登場する探偵たちを見るたびに、

小説に登場する探偵たちの華麗な活躍を読むたびに、

思うのである。

優希

ああ、やっぱり……

優希

探偵ってやつは、かっこいいなあ、と。

某月某日 藤宮探偵事務所

優希

「というわけで、ここにきたわけです」

千春

「というわけで、と言われましても……」

千春

「要するに、助手になりにきたってことかな？」

優希

「はい！ そういうことです！」

優希

「テレビや雑誌で藤宮さんの活躍を聞いて、

ここしかないと思いました！」

優希

「日本の女性ホームズと名高い、

藤宮さんの事務所しかないって！」

千春

「そんな異名を聞いたのは初めてだけれども……」

千春

「えっと、貴女は今、高校生？」

優希

「高校三年生です！」

千春

「探偵事務所に来るより、

受験勉強をしたほうがいいんじゃ……」

優希

「受験勉強なんていつでもできます」

千春

「いやぁ……

人生の限られた間しかできないと思うよ？」

千春

「私もそれをしてれば、

こんなところで事務員やってないかもだし」

優希

「ただの事務員じゃないですよ！」

優希

「今、日本で一番ホットな探偵事務所の事務員ですよ！」

千春

「別に事務員はホットじゃないんだよなぁ……」

優希

「それで、どうですか？」

優希

「私、ここで働かせてもらえたり？」

千春

「私の一存ではなんともいえないってば。

ただの事務員なんだから……」

千春

「まあうん、もうすぐ所長が帰ってくるから、

本気なら直接交渉してみてくださいね」

千春

「あんまり望みはないと思うけどね」

千春

「あの子、結構人見知りだから……」

優希

「私、誰とでもすぐに仲良くなれるほうなんで」

千春

「それはそれですごい自信だねぇ」

（足音）

千春

「お、噂をすればだね」

（ドアが開く音）

志保

「ただいま……

うん？ お客さん？」

千春

「お客さんというか……」

優希

「あ、あの……！」

優希

「サインを貰っても、いいでしょうか！」

（暗転）

千春

「……というわけです」

志保

「なるほどなるほど……」

志保

「えーっと、そうだなぁ……

とりあえず、お名前は？」

優希

「吉澤優希です。高校三年生です」

志保

「あらら、じゃあ勉強とか大変だね？」

千春

「それ、さっき私も言った」

志保

「ふむ……

とりあえず、初めまして」

志保

「ご存知かもしれないけど、

私がこの事務所の所長、

藤宮 志保です。一応探偵ってことになるかな」

志保

「で、さっきまで貴女の相手をしてたのが、

私の幼馴染でここの事務員をやってる……」

千春

「霧山 千春です。

自己紹介忘れてたね？」

志保

「それで……

アルバイト希望ってことで、いいのかな？」

千春

「正確にいうと、助手希望だね」

優希

「そうです！」

優希

「私、前に藤宮さんのご活躍をテレビで知って……

それで、自分が働くならここしかないって思って！」

千春

「志保の大ファンなんだってさ。

なんだっけ、女版ホームズ？」

志保

「なにその恥ずかしい二つ名……」

志保

「えっと、吉澤さん？」

優希

「はい！」

志保

「もしかすると、探偵に憧れがあるのかもだけど……」

優希

「あ、大丈夫です。

現実の探偵がどんなことをしてるかは、

流石に知ってるつもりです」

優希

「所在調査とか、迷い猫探しとか、

浮気調査とかですよね？」

志保

「……うん、まあ、そういうこと。

おおよそ華々しい世界とは無縁だって、

そこは理解してるわけだよね？」

優希

「悲しいことに、理解しています」

優希

「でも、藤宮さんは違いますよね」

優希

「旅行先で起こった殺人事件とか、

招かれていったパーティー会場での窃盗とか、

解決したんですよね？」

志保

「たまたまです、たまたま」

志保

「ほんっとーにたまたま、

運良く、偶然、奇跡的に、

警察の仕事をお手伝いしただけです」

優希

「それでもです！

たまたまでも、偶然でも……」

優希

「フィクションの世界の探偵が、

現実にもいたんだって、

私おもったんです」

優希

「そしたら、居ても立っても居られなくなって」

千春

「すっごい行動派だね、優希ちゃん……」

志保

「うん、まあ、うん。

その探偵にかける情熱はね、わかった」

優希

「ほんとですか！？」

志保

「うん、本当。

すごい探偵が好きなんだなって思うよ」

志保

「でもね、ごめんね？

いまある依頼が全部終わったら……」

志保

「この事務所は、閉めちゃうつもりなの」

優希

「閉めちゃうって……どうしてですか！？」

志保

「そこは、なんというか……

プライバシーの問題ってことで」

志保

「とにかく、私はもう探偵をする気はないんだよね」

志保

「せっかく尋ねてくれたのに悪いんだけど、

とにかくそういうことだから」

志保

「ごめんなさいね？」

（暗転）

千春

「まあ、そう気を落とさずに」

優希

「はい……」

千春

「志保にもいろいろとね、事情があるから……」

千春

「断るための方便とかじゃあ、ないんだよ？

ほんとだよ？」

優希

「大丈夫です。わかってます。

でも、ちょっとショックです……」

優希

「私も、本当の探偵になれるって、

なりたいって、そう思ったから……」

千春

「まあうん、気持ちはね、わかるよ。

昔は志保も、そういう子だったし」

千春

「ただ、ちょっとばかし現実が手強くてさー」

千春

「ほら、探偵なんてヤクザな商売だからさ。

人には嫌われるし、依頼人は無茶言うし、

ターゲットには恨まれるし……」

千春

「っと、ごめんね。

夢見る前途ある高校生に聞かせる話じゃないっか」

優希

「いえ、大丈夫です。

わかってます……」

千春

「んん〜……」

千春

「しゃーないな、ちょっとお待ちなさい」

優希

「え？」

千春

「前途ある若者に、

お姉さんが道を作ってあげよう」

（去っていく足音）

（戻ってくる足音）

千春

「うんうん、よしよし」

優希

「あの、一体何を」

千春

「君をアルバイトとして雇うことになりました」

優希

「へ？」

千春

「さっき志保が言ったでしょ？

今ある依頼が終わったら〜って」

千春

「なんだかんだと売れっ子名探偵なんで、

依頼もびっくりするほどあるわけなのよね」

千春

「なので、それが終わるまでの間だけ、

お手伝いをお願いしようかな、という」

優希

「それって……」

千春

「うん、なんだろうね。

本当は所長が言うのがいいんだろうけど」

千春

「藤宮探偵事務所にようこそ！

って感じかな？」

（暗転）

（翌日）

千春

「っというわけでー」

優希

「今日からお手伝いさせていただきます！」

志保

「あ、はい、うん、わかりました」

優希

「まずは何をしたらいいですか！？」

千春

「私は書類とか用意するから、

志保の方で適当によろしく」

志保

「自分で雇っておいて丸投げするんだ……」

千春

「よろしく～」

志保

「うーん……どうしようかな」

志保

「依頼はまあ、たしかにたくさんあるけど……」

優希

「なんでもやりますよ！」

志保

「うん、やる気十分だね……」

志保

「そのやる気がすごい眩しい……」

千春

「目がくらんじゃうくらい？」

志保

「若かりし日を思い出す……」

優希

「大丈夫です！

まだ若いですよ、志保さん！」

志保

「うわー嬉しくなーい」

志保

「アラサーも目前で女子高生と交流を持つなんて、

人生ってわからない……本当にわからない……」

千春

「探偵でもわからないことがあるんだねぇ」

志保

「わからないことだらけだよ……」

優希

「それがいつか分かるようになるのが、

　探偵のお仕事ですね！」

志保

「知らない……私の業務じゃない……」

千春

「で、どうするの、この子は」

志保

「どうするって言われてもなぁ……」

志保

「とりあえず、今日は依頼人が来るから、

　その対応を一緒にしてもらおうかな」

優希

「こんな雨の日でも、依頼はあるんですね」

志保

「むしろ雨の日こそ多い気がするけどね。

　根拠はないけど、そんな感じ」

志保

「ジンクスというか、なんというか」

（インターホンの音）

志保

「っと、噂をすれば、かな」

千春

「ごめーん！　対応できなーい！」

優希

「あ、私が出ます！」

（ドアが開く音）

優希

「はい、藤宮探偵事務所へようこそ！」

女性

「……高校生？」

志保

「すいません、助手です……

　たぶん、一応、形式上は……」

（暗転）

志保

「えーっと、要約すると……」

志保

「迷子になったペットの捜索ですね？」

女性

「家族です」

志保

「ええ、まあ、はい、

　そこは言葉の綾です」

志保

「その、猫のティアラちゃんでしたか」

志保

「なにか、特徴などはありますか？」

女性

「一目見ればわかります」

志保

「といいますと……」

女性

「ほかの猫より気品があって、

　ほかの猫よりきれいで、

　ほかの猫よりかわいいです」

志保

「は、はあ……」

女性

「一応、写真をお渡ししておきますね」

女性

「では、よろしくお願いします」

（足音）（ドアが開く音）

優希

「まあ、飼い主は誰でも、

　自分のペットが一番だと思ってますよね」

志保

「そういうものかなぁ……」

志保

「とはいえ、今回は楽な仕事だね。

　写真もあるし」

優希

「そうなんですか？」

志保

「酷いときは口頭で特徴だけ言われたり、

　種名だけ言われたりしたから……」

千春

「それで見つけられる志保も志保だけどね」

志保

「やめて、褒めないで」

志保

「とにかく、これは簡単なお仕事だね」

千春

「うん、私もそう思う。

　ぴったりだと思う」

志保

「じゃあ、そういうわけで」

優希

「え？」

千春

「ポカンとした顔をしてる場合じゃないぞ！

　君の初仕事だ探偵助手見習い！」

優希

「あ、はい！

　えっと、なにをすれば！」

志保

「全部よろしくね」

優希

「え？」

志保

「この迷い猫捜索は、

　一から十まで全部、

　優希ちゃんがお願いね」

優希

「いきなりですね……」

志保

「仕事は待ってくれないからねー」

千春

「私も手伝うから大丈夫大丈夫！」

志保

「とはいえ、今日はあいにくの天気だから……

　明日から、よろしく」

千春

「とりあえず今日は、

　この書類の片づけを手伝ってもらおうかな！」

優希

こうして、私の探偵活動初日は、

特筆すべき出来事もなく、終わったのだった。

（翌日）

（探偵事務所）

千春

「はいこれ、写真ねー」

千春

「可愛い猫ちゃんだよこれは。

飼い主がめろめろになるのもわかる」

千春

「特にこの、おでこの模様が可愛いね。

白と黒の毛並みが、うまいこと重なってるから」

優希

「なんだかハートみたいに見えますね」

優希

「たしかに、こんなに特徴があるなら、

探すのは案外簡単かも……」

千春

「今回、というか、この手の依頼はね、

うちの事務所ができてすぐからずっとあるから、

それなりに目処とかコツとかあるんだよねー」

千春

「猫が好きで餌をやってる人の家とか、

近所の人は迷惑だろうけど、

私たちにはありがたい所だね」

優希

「なるほど……」

優希

「ところで、今日は藤宮さんは？」

千春

「あー……

志保はちょっとお出かけ中」

千春

「依頼は一つだけじゃないからね。

昨日みたいに、増えることもあるし」

千春

「やめるんだから、断ってもいいのにね」

優希

「やっぱり、辞めちゃうんですか」

優希

「昨日、依頼を受けてたから、

まだ少し望みはあるのかなって、

そんなふうに思ったりもしたんですけど」

千春

「んんん……

こればっかりは本人次第かなぁ」

千春

「ずるい言い方をするとね、

大人になればわかるってやつ？」

千春

「さて！

この話はこれでおしまい！」

千春

「いざや行かんや猫探し！」

優希

「……お、おー？」

千春

「おー！」

（暗転）

（公園）

千春

「はっはっは」

千春

「いねえや」

優希

「いませんねえ……」

優希

「写真では、すぐにわかる顔なんですけどね」

千春

「まあ、一日で見つかるとは限んないしね」

とりあえず、目撃情報でも集めるかな」

優希

「聞き込みとかですか？」

千春

「張り紙とかは飼い主がやっただろうし、

私たちは地道な努力をしないとね」

優希

「わかりました」

優希

「ちなみに、なんですけど……

どんな人に聞いたらいいですか？」

千春

「猫が好きそうな人」

優希

「それって、見てわかるんでしょうか……？」

千春

「わかんないね。

志保ならできるかもだけど」

千春

「人間観察とか得意だから、あの子」

優希

「おお～……

すごい探偵っぽいです！」

千春

「ぽいっていうか、探偵だからねー」

千春

「しかーし！

我々にはそんなスキルはないので、

地道に、手当たり次第にしかないのです」

千春

「しいていうなら、小さい子とか？

猫とか好きそうだし」

優希

「とりあえず、やってみます」

千春

「うんうん、その意気だ！

さあ、聞き込みにはいるぞ探偵助手見習い君！」

優希

「はい！」

（暗転）

（公園）（可能なら夕方くらい）

千春

「はっはっは！」

千春

「収穫ゼロとは……」

優希

「どうしましょうか……」

千春

「まあ、初日だしね。

こんなものといえばこんなものかも」

千春

「明日もあるし、

今日はこのくらいにしよっか」

優希

「はい……」

千春

「おいおい、このくらいで凹まないでよ。

まだまだ先は長いんだよ？」

千春

「明日は別の公園とか、

隣町辺りまで行くとか、

いろいろやらないとねー」

優希

「そうですよね……」

千春

「そうそう。

なんでもかんでもすっぱり終わるわけじゃないし、

過程を楽しまなければいけませんよ、お嬢さん」

優希

「はあ……」

千春

「さてさて、それじゃあ帰ろうか。

とりあえず、一旦事務所によってもらえる？

時間大丈夫？」

優希

「あ、はい！　大丈夫です！」

千春

「んじゃ、帰りますかー」

（暗転）

（事務所）

（ドアの開く音）

千春

「ただいまー」

志保

「ええ、はい、はい……

そうですか、わかりました」

千春

「ありゃ、電話中か」

優希

「依頼人とかでしょうかね？」

千春

「いや、それはわかんないなー……

警察の知り合いとかかもだし」

優希

「警察の知り合い……！

なんか、すごいです！」

千春

「警察上層部に多数の知り合いのいる、

怪しい民間人とは私達のことだよ」

志保

「では、お手数ですがお願いします……

……ふぅ」

志保

「怪しい民間人になった覚えはないんだけど？」

千春

「でも、実際の所そうじゃない？」

千春

「普通の人は、そんなに警察に知り合いいないよ？」

志保

「うう、なにも否定できない……」

志保

「で、今日の成果は……

その感じだと、ダメそうだね？」

優希

「面目ないです……」

千春

「いやいや、初日で見つかるほうが稀だって！

なんにも申し訳無くないからね！」

志保

「千春、それ、私のセリフ……」

志保

「まあ、千春の言うとおりだから大丈夫。

とりあえず、今日の経緯だけ教えて？」

千春

「依頼を受けてから終了までの報告書が必要なのです。

事務員としては面倒くさいことこの上ないよ！」

志保

「自分から立候補してきたくせに……」

千春

「だって、志保を一人にしとくの不安だったし、

ちょうど就職先も決まらなかったし、

幼馴染なら安心だし？」

志保

「優希ちゃんは、

こんなだめな大人にならないように」

優希

「は、はあ……」

志保

「まあとにかく！」

志保

「報告書の作成を細々やらないとね、

面倒なことも多いから」

志保

「特にペットの捜索なんかはね……」

千春

「なんかいろいろ、

嫌な思い出が蘇ってきちゃうねぇ」

優希

「嫌な思い出って、

なにかあったんですか？」

千春

「なんていうか……

探偵に依頼する人っていうのはねー……」

志保

「殺人事件はその場で解決するとか、

手品の種は一瞬で見破れるとか」

志保

「いくらなんでも過剰な期待なんだけど、

そう思ってる人が多いんだよね」

志保

「そりゃ、運が良ければ探しものは見つかるし、

ペットだってひょっこり出てくることもあるけど」

志保

「殺人事件は本来警察の領分だし、

手品の種に至ってはお門違いというか……」

千春

「でもって、最初は私達も素人だったから、

猫を探すのに二週間くらいかかってねー」

優希

「依頼人が怒ったとかですか？」

千春

「報酬が半分まで値切られたね」

優希

「え」

志保

「依頼自体は達成してるのに、

まるで失敗したかのように言われて……」

志保

「そういうわけなので、

探偵業はスピード命！」

千春

「さて！

とりあえずは報告書だね」

千春

「書き方教えるからこっちへどうぞ～」

優希

「あ、はい！」

志保

「終わったら、今日はお疲れ様ってことで」

優希

「はい！　お疲れ様でした！」

（暗転）

（翌日）

（背景：公園）

千春

「さてさて、今日もやっていきますかー」

優希

「よろしくお願いします」

千春

「とりあえず、今日は捜索範囲を広げてみよっか。

猫はそこまで活動範囲が広い生き物ではないけど、

迷い込んじゃうこともあるしねー」

優希

「わかりました！」

千春

「いやーしかし、

早い所見つかってほしいね本当」

優希

「やっぱり、こういう依頼は大変なんですか？」

千春

「それもあるけどねー……

なんていったらいいかなぁ」

千春

「今回の依頼の最高の結果って、

何だと思う？」

優希

「それは、えっと……」

優希

「当然ですけど、

猫ちゃんが見つかるのがベストでは……」

千春

「ちょっとだけ、違うかな。

もちろん見つかるに越したことはないけど、

ただ見つかればそれが最良ってわけじゃなくてね」

千春

「頭に「無事に」ってのがつかないといけないの」

優希

「無事に……？」

千春

「こういっちゃうとあれだけど、

所詮は猫だからさー……

車に轢かれるとか喧嘩するとか、あるよね？」

優希

「まあ、それはそうですね……

家でだって怪我する時はしますし」

千春

「でもって、家飼いの動物にとってはさ、

外の世界なんて危険でいっぱいなわけで、

ちょっとしたことでだめになりかねない」

千春

「そんな中で、依頼人が望んでるのはさー……」

優希

「自分のペットが、別れたときと同じ姿なこと……」

千春

「そーゆーこと」

千春

「前にも言ったけどね、

探偵なんて損な職業だから」

千春

「怪我をしてれば怒られるし、

病気になってれば文句も言われるし、

最悪の場合なんか、想像もしたくないよね」

優希

「でも、それは千春さんたちのせいじゃ……」

千春

「そりゃあ私達だって、

自分たちのせいだなんて思わないけど、

依頼人は違うのよ」

千春

「怒りのぶつけどころがないからかな、

なんて私と志保は思ってたりするけど」

千春

「そういうわけなんで、

兎にも角にもスピード命で」

千春

「早ければ早いほど生存率が上がるのは、

人間も猫も一緒なんだねぇ」

優希

「なるほど……」

千春

「ごめんね、夢のないことを言って」

優希

「そんなことないです！」

優希

「もしも私が探偵になるなら、

きっと、そういうところも見なきゃいけないし……」

優希

「今のうちに教われてよかったって、

そうおもいます！」

千春

「そう？

それなら、よかった」

千春

「さて、今度こそ行きますか！

猫ちゃんの無事を祈りつつ！」

優希

「はい！」

（暗転）

（背景：公園（夕方））

千春

「はっはっは！」

優希

「いませんね……」

千春

「これはどうしたことだろうねえ」

千春

「このあたりの溜まり場は全部回ったし、

そうでなくても目立つ子だから、

目撃情報くらいはありそうなものだけど」

優希

「実はもう、家に帰ってたりしませんかね？」

千春

「ううん……

猫は家につくっていうし、

可能性としてはなくはないけど……」

千春

「とりあえず帰って、志保に相談しよう」

優希

「ちなみに、なんですけど」

優希

「どのくらいで見つけたほうがいい、

みたいな指標って、あるんでしょうか」

優希

「一週間以内とか、五日間とか、

そのくらいですか？」

千春

「んんー……

今までの経験から言うと、

あのタイプの飼い主は……」

千春

「三日？」

優希

「え、それって……」

千春

「うん、今日には見つけておきたかったね！」

千春

「いやー……

まいったなー、これは！」

千春

「初日は雨が降ってたからとしても、

明日には見つけないと面倒くさいかな！」

優希

「ま、まずいじゃないですか！

これはもう、今からでも探しに！」

千春

「いや、それは無理だと思うよー」

千春

「暗くなったら猫の模様なんかわからないし、

そもそも、君、高校生でしょう」

千春

「あんまり遅くなると親御さんも心配するし、

補導されかねないし……」

優希

「そこを言われると弱いんですけど……

でも、明日で見つけられそうなんですか？」

千春

「だから志保に相談するの。

あの子はねー、頼りになるよー？」

優希

「そりゃあ頼りになるでしょうけど、

猫探しでも活躍されてるんですか？」

千春

「有名になる前はよくやってたよー？

今はちょっと、忙しくてやれてないけど」

千春

「ていうか、今回のも本当はね、

本人もやりたがってた節、あるから」

優希

「そうなんですか？

忙しそうなのはわかるんですけど……」

千春

「大きな事件を扱いすぎてね、

こういうことができなくなっちゃったから」

千春

「やりたいなら、やらせてあげたいんだけどね」

（暗転）

（背景：事務所）

千春

「っというわけで！」

千春

「なんの成果も！」

優希

「得られませんでしたっ！」

志保

「なんかすごい、息ぴったりだね……」

千春

「打ち合わせ済みだから安心してね！

なんの成果もないのは本当だけどね！」

志保

「なにも安心できない！」

優希

「す、すいませんでした……」

志保

「あ、いや、その、

別に優希ちゃんのせいじゃないから……」

志保

「えっと、それで結局？」

優希

「今日は捜索範囲を広げてみたんですけど、

見つかりませんでした……」

千春

「影も形も存在しないんだよ？

目撃情報さえなし！」

千春

「……最悪のパターンかも？」

優希

「それって、もしかして……」

志保

「もう死んでるんじゃないかってこと」

優希

「その場合はどうするんですか？」

志保

「どうするんですかって言っても……

どうもできないが、答えじゃないかな」

優希

「そういうもの、なんですか……」

志保

「というか、多分まだ大丈夫だと思うんだけど」

優希

「え？　どういうことですか？」

志保

「だから、多分最悪のパターンではないよって」

千春

「なんで分かるわけ？

志保は一回も猫探してないのに」

志保

「保健所っていう、

野良猫野良犬のエキスパートがいるからね」

優希

「それって、誰かが保健所に持ち込むってことですか？」

志保

「違う違う。

保健所って別に、犬猫の保護とか、

まあ、殺処分とか、それだけが仕事じゃないの」

志保

「遺体の回収とかも仕事なんだよ」

優希

「遺体の、回収……」

優希

「あ、もしかして」

志保

「うん。

目立つ特徴の犬猫なら、当然職員の記憶に残るよね」

志保

「でも、そんな記憶はないらしいから。

一応他の職員さんにも聞いてもらってるけど、

今のところは報告なしだし」

千春

「ちょっと待って！

いつの間に確認したのそれ！

初耳なんだけど！」

志保

「聞かれなかったし……」

優希

「……？

あ、わかりました！」

優希

「昨日、私達が帰ってきた時の電話！」

志保

「おお、鋭い。大正解です。

ちょうどあの電話が、保健所に確認した時のだよ」

千春

「だから、なんで教えてくれなかったの？」

ホウレンソウって知らない？」

志保

「おひたしにすると美味しいやつ」

優希

「胡麻和えも美味しいですよ」

千春

「そっちの話はしてないからね。

わかりきったギャグはいらないの」

志保

「最初っから死んでることを想定してるの、

なんか嫌じゃない？

だから教えなかったのもあるよ」

志保

「記念すべき初仕事がそんなふうに終わったら、

かわいそうだなって思ったからね」

優希

「……ありがとう、ございます」

志保

「ん、どういたしまして」

志保

「さてさて、それじゃあ……

明日は私も探しに行こうかな」

千春

「日本の女ホームズが、ついに重い腰を」

志保

「重いとか言わないで！

ていうか、その二つ名も嫌だからね！」

志保

「まあとにかく、明日はよろしくね、優希ちゃん」

優希

「はい！　よろしくお願いします！」

志保

「あ、千春は留守番だからね」

千春

「致し方なし……」

（暗転）

（翌日）

（背景：公園（昼））

志保

「さてさて、探そうかー」

優希

「でも、このあたりは昨日も一昨日も探しましたよ？」

志保

「そこはそれ、考え方を変えましょう。

思考は柔軟にね」

優希

「考え方……えーっと」

志保

「猫はいないんじゃないよ、

見つけられないだけ」

優希

「すいません……

違いが、よくわからないです」

志保

「うーんとねぇ……」

志保

「私たちは、大学卒業後にいろいろとね、

おおよそ三年くらい、猫を探してきたわけだけど」

優希

「そうきくと、ちょっとあれですね」

志保

「私も、今そう思った所」

志保

「とにかく！

猫が見つけられない理由をね、

いろいろと理解したわけなの」

志保

「一つは当然、その場所にいないこと。

いないものはどう探してもみつからないよね」

優希

「まあ、それはそうですよね……

でも、今回は違うわけですか？」

志保

「すくなくとも、私はそう思ってるよ」

志保

「二つ目は、見つけにくい場所、

見つからない場所にいること。

怪我をしたから隠れてるとかね」

志保

「でも今回は、これも違う。と思う。

理由は簡単で、家猫だから。

隠れる場所なんかわからないと思うし」

志保

「となると答えは多分……」

（猫の鳴き声）

志保

「あ！　その子捕まえて！」

優希

「は、はい！」

志保

「逃げるから気をつけて！」

（なんかドタバタしてる感じ）

優希

「おとなしくして！」

志保

「今っ！」

優希

「……」

志保

「……」

優希

「捕まえましたぁー！」

志保

「よしよし、おつかれ～」

優希

「でも、この子……

どう見ても、別の猫ちゃんじゃないですか？」

優希

「あの、額の特徴的な模様もないし……

色も全然違う気がします」

志保

「首輪」

優希

「え？　あ、本当だ。

首輪がついてる……」

志保

「多分、名前も書いてあるよ」

優希

「……！

本当だ！　この子が……！」

志保

「これにて一見落着～」

（暗転）

（事務所）

優希

「種明かしを！

種明かしをお願いします！」

志保

「いやいや、

手品じゃないんだから……」

千春

「アタシも教えてほしいなー」

志保

「あんたはその前に、

猫ちゃん洗ってきて」

千春

「え～……」

（フェードアウト）

志保

「さて、ではまあ、

理由を説明しようかな？」

志保

「最初に言っておくと、

一発で当たったのは本当に偶然だよ」

志保

「ただ、昨日の時点である程度、

外見のあたりはついてたけどね」

優希

「外見、ですか？」

志保

「雨の日に迷子になった家猫がさ、

綺麗なままでいるわけないよね？

泥まみれになったりとかさ」

志保

「なので、茶色っぽいというか、

汚れた猫を探したわけ。

首輪がついてるやつをね」

優希

「なるほど……

凄いです……全然、思いつきもしませんでした」

志保

「そこはほら、経験とかね」

志保

「さ、依頼人が引き取りに来るから、

シャンとして、自信ある顔して！」

千春

「そして成功報酬を搾り取って！」

志保

「いや、それはしないけど……」

（インターホンの音）

志保

「お、噂をすれば」

優希

「あ、私が対応します！」

（ドアが開く音）

依頼人

「あの、ここが藤宮さんの事務所で……」

優希

「……あれ？」

千春

「あー……」

千春

「新規様一名、ごあんなーい」

志保

「……いつになったら終わるんだろう」

優希

こうして、私の探偵としての初仕事は終わった。

優希

この後も、やめると言いつつ依頼を断れない志保さんにより、

次から次へと依頼が舞い込み、なんだかんだと……

優希

私は、探偵としての道を進んでいくのである。

了